

禮吾地僻聚儒衣 三尺絲桐滿架書 細草幽蘭秋徑馥 清風明月夜窓虚
固知聖教元無隱 惟有人心卻是危 記取當年簞食樂 殘蟬斜日任悲淒

【読み】

禮して吾が地は僻（へき）にして 儒衣を聚（あつ）む 三尺の絲桐（しとう） 架書（かしよ）満つ 細草幽蘭 秋徑に馥（かお）り 清風明月 夜窓に虚（むな）し 固（もと）より知る 聖教（せいきょう）は元（もと）隱（かく）すこと無けれど ただ人心有るは、却（かえ）つて是（これ）危（あやう）し。 記（しる）し取れ 当年 簞食（たんし）に楽しむを 殘蟬（ざんせん）斜日 悲淒（ひせい）なるに任（まか）す。

【意味】

私の住んでいる土地は人里離れた僻地にありながら、礼をもつて学者たちを迎え集め、家には三尺ほどの琴を備え、書架には書物がいっぱい詰まっている。細やかな草と幽蘭が秋の小道に香りを放ち、清らかな風と明るい月が夜の窓を澄ませている。もともと聖人の教えは隠されたものではないと知りつつも、ただ人の心はかえって危ういものだと感じる。あの昔、粗末な食事でも楽しめた心を忘れず、今は鳴き残る蟬と沈む夕日に、もの悲しさをまかせている

*儒衣：儒者（学者） *絲桐：琴や瑟（しつ）など弦楽器 *幽蘭：幽（かす）かな香りの蘭 *虚：澄みわたってさえぎるものがない。むなしいほどに清らか。 *聖教：聖人の教え、ここでは儒家の教え。 *記取：心に留めておけ。 *簞食：竹の器に盛った粗末な食事 *悲淒：もの悲しく、もの寂しい

【出典】 秋日書懷 （胡居仁・明） 秋の日に、心に湧き起こった思いを詩に書き記す

※人里離れたところで書物や琴に親しみつつ、世の中の人の心の移ろいや危うさを思い、昔の清貧の日々をなつかしく思い出し、秋のものの寂しさにひたっている。